

口の狭い扇状地に、家がしがみついていた。7年前の大惨事のおもかげはもはや失なわれ、人々は新しい生活を始めている。しかし、一夜のうちに村を崩壊させた自然の力を思うと、その偉大さが感じられ恐ろしい。現在の姿が何事もなかったように静寂そのものであるだけに、よけいに強く感じられる。

翌7日は猪之頭の養鱒場、わさび栽培の様子を見る。いずれも富士山の湧水を人間が利用しているのだ。今夜の宿泊地白糸の滝に正午前に到着。ここでは白糸の滝の小気候の観測を行う。観測の説明、分担の後、グループごとに別かれて風速、水温、気温、湿度を測る。天気はますます悪化し、大雨になったので観測を中止する。夜は観察結果をまとめ、地図に記入する作業を行う。

巡検も三日目になると少し疲れてくる。朝起きるのがつらい。五時に起床して早朝観測。昨日と違って、天気はすっかりよい。きのうの初雪をかぶった富士がすっきりと姿を見せてくれる。今日は大石寺、浅間神社をへて、ヘドロで有名な田子の浦港へ行く。田子の浦港は割合に小さい人工港で、徒歩で軽く一周できる。ヘドロがぶかぶか海水に浮いているのだろうと想像していたのだが、いくらなんでもそこまでひどくはなかった。しかしヘドロに汚染された水は港外に出ると、その海水とはっきり区別できるほど褐色である。それが潮の関係か、港の出口から帯状に東向きに流れ出て、水平線まで続いている。なんともいえない光景であった。こうして私達は田子の浦港を後にして帰路につき、三日間にわたる巡検を終えた。

今回の巡検の感想は『百聞は一見に如かず』ということわざに言いつくされる。見るというのは本当によくわかるものだ。ただ、その見方が問題であろう。巡検では、自然と人間を予備知識とともに地理的に見る目を養うところにその目的があると思われる。といっても、実際に巡検に行った結果は、その目的とは程遠いようだ。見方は漫然としたものであり、予備知識もたいしたものではなかった。しかし、毎晩の反省会では、今までぼんやりとしていたものが、その光景を頭の中で思い浮かべることによって、急に他の現象と結びつき、相乗的にはっきりすることがしばしばであった。初めての巡検の成果はこのあたりにあるような気がする。（1年 上 村 恵利子）

韓国巡検で感じたこと

吉 田 晶 子

9月3日に下関を出航してまる一週間、総勢四名、正井先生の韓国巡検で私にとっては初めて外

国を歩いてきました。釜山から慶州、大邱をまわり、ソウルに4泊して「まち」の観察をしたというわけです。そこで感じたことを思いつくままに述べてみます。だいたい日本語が通じるし、人の顔も似ているし、都心の車や人やビルなどの様子からも、ソウルと東京は似ているように思えます。しかし一方、日本人である私には適応しにくい部分が、ソウルの景観の中にはあります。帰りの飛行機から日本の山と田が見えたとき、そしてモノレールの窓から東京の景色を何となく見ていただけで、なにかほっとした感じでした。もちろん旅の疲れということもあるでしょうが、それよりも、私が日本の自然の中で育ち、東京のまちの景観を見慣れていて、自分が一番落ち着いた気分でいられるような景観がそこからでき上がりかけていたからではないかと思うのです。

ではソウルと東京のまちの景観の違いを、気のつくままにあげてみます。まず、自然そのものの違いに由来することでは、緑の量の差です。郊外にはハゲ山はあまりありませんでしたが決して緑が豊かとは言えないし、都市の中では、ヤブが所々見える程度で、庭もつくらないし、神社もないのですから、東京のいわゆる住宅地を見慣れた目には異様な感じがします。ちょっと小高い丘の上までびっしり家が建っています。私には、やはり緑と共存して家のある景色の方が見ていて安心です。おそらく日本人で、緑を見て落ち着かないという人はいないのではないでしょう。

また、気候が乾燥していることに由来すると思われませんが、家の建築材料が違います。ソウルの新興住宅地を見ましたが、れんがを（おそらく日干レンガ）積むだけです。見た目には、どっしりした感じの家となります。日本の木造の家は、いかにもうすっぺらく、たよりない感じがしますが、やはり私にはその方が安心です。

自然条件（とくに気候と地盤）の違いは、人間の感覚というか、態度のようなものにも表われるのでしょう。たとえば、私には、「まちづくり」に対する態度が、日本とは違うように思われました。ソウルなどを見ていると、「まち」とは、全く人間の手で造るもの、人の手でがっちり固めてしまうもの、という暗黙のコンセンサスがあるのではないかと思いたくなります。いわゆる朝鮮家屋というのは、L字型かコの字型で、中庭式になっていて、隣同士が連結しています。上からみると屋根がつながっています。モダンな住宅でも、庭のスペースをあまりとらず、隣家とずいぶん近接して建てています。中庭にしても、たいてい石かコンクリートで固めてしまっていますし、へいを見ると、例外なく高く立派で、いわば、囲んで固めて生活しているという感じです。

日本人のことを考えると、「まち」であっても、自然と一緒に、自然と妥協して、住んでいるように思われます。自然に対して、その恵みも害もあまり気にすることなしに、実にあいまいな態度で接してきたのだと思うのです。「都市に緑を」と、最近よく言われていますが、ソウルなどから見ると、これは全く日本的なスローガンだという気がします。なぜなら、自然にあまりにも甘えて

いた結果でてきたことだと言えるし、その緑の内容も日本的なものだと言えるからです。つまり、多くの日本人は、都市に緑をとりもどそうという場合、おそらく自然のままに近い木や草を思い浮かべるのではないのでしょうか。レイアウトされた公園や、規則正しく植えられた街路樹などは作られた緑であって、ほんとうの緑とは感じにくいのではないのでしょうか。結局、自然の中にとけこもうとする態度が、日本人にはあるように思えてなりません。

こんなことを、ソウルのまちの目に見える景観を見て感じました。目に見える「もの」だけでなく、市民の生活のこと、言語のこと、対人関係のこと、その他いろいろな面を比べてみれば、ソウルと東京のそれぞれの特徴がもっと正しくわかってくるでしょう。短い期間で、これだけの大都市を見てきたのですから、それだけでも私にとっては、おもしろい巡検でした。(大学院1年生)

東京都千代田区神田駿河台2-10
TEL (291)2757~8 振替東京35340

古今書院

服部銈二郎・杉村暢二共著

商店街と

商業地域

A5 価三二五〇〇円

商業地理研究の経緯、商業立地論、商業地域形成論、商圏論などの理論編と、全国的規模による商店街の種々な業種の立地の現状を多数の図や表を駆使して分析解明する。とくに商業地域の診断を通して再開発への具体的な方策をも述べる。また商店顧客両者にとって理想的な商店街のあり方などの実用的な面において十分役立つ内容。商業地理の決定版。

市川 正巳著

水文学の基礎

A5 価三二〇〇〇円

水収支の調査研究方の基礎的なもの、及び具体的な研究事例を豊富に上げ、地球全体の水収支から地域の水収支にいたるまで、水の在り方と性格をとらえる。水文学研究者はもちろん、水行政面でも合理的水の開発利用とその保全など実用面でも利用価値大。

石井 実著

地域を写す

B5 価二一〇〇〇円

プロ写真家の芸術中心の写真と異なって地理的な目を通して各地域の自然・人文の諸事象を的確にとらえた写真を集録。小・中・高社会科地理教育の教材として最適なばかりか、地理を志す人々への地理写真への指針を与える。見て楽しいユニークな写真集。

石井実・地理写真集